

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.29

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Marcus Miller【マーカス・ミラー】



写真提供：ビクターエンタテインメント

Profile

1959年6月14日、米国ニューヨーク州ブルックリン生まれ。本名はWilliam Henry Marcus Miller Jr.。教会のオルガン奏者だった父親の影響で、13歳の頃までにクラリネット、ピアノ、エレクトリック・ベースを弾き、作曲も始める。10代半ばからNYでベーシストとして数々のギグに参加。その後、ポビー・ハンフリーやロニー・リントン・スミスのバンドに参加し、曲も提供。スタジオ・ミュージシャンとして、アレサ・フランクリン、ロバータ・フラック、デイヴィッド・サンボーン等と共演。81年マイルス・デイヴィスの『ザ・マン・ウィズ・ザ・ホーン』に参加。83年にアルバム・デビューを果たす。86年にはマイルスの『ツツ』でプロデューサーも務め、一躍名を馳せる。87年に「ジャマイカ・ボーイズ」結成。その後も独特のスラップ、タッピング奏法で他のベーシスト達に多大な影響を与え、ジャズだけでなく、R&B、ファンク等、様々な音楽ジャンルで才能を発揮し、自身のソロの他、プロデューサー、作曲家・編曲家としても八面六臂の活躍を見せている。ベース以外にバスケットボールの演奏の素晴らしさも有名。来日回数も多く、この5月に5年振りとなるスタジオ録音アルバム『ルネッサンス』を発表。6月で53歳を迎える今もジャズ・シーンを牽引し続けている。現在最高峰のエレクトリック・ベーシストの一人。

そのグルーヴ感と独特のスラップ奏法は天下一品！

10代半ばの頃にジャコ・パストリアスの名盤『ジャコ・パストリアスの肖像』を聴いて信じられないほどの衝撃を受け、2年間ひたすら練習に明け暮れてジャコを研究し尽くしたというマーカス。その後、マイルス・デイヴィスとの出会いで自身のサウンドを確立したという。トレードマークの'77年製フェンダー・ジャズベースから生み出されるグルーヴ感と独特のスラップ奏法で、今やジャコと匹敵するほどのベーシストに君臨したと言っても過言ではないマーカス。意外に知られていないが、マイルスの黄金クインテットで活躍した名ジャズ・ピアニストのウィントン・ケリーはマーカスの叔父にあたる。

MM's Great Album

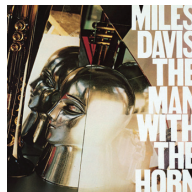
リーダー作をはじめ、サイドマンとして参加した名盤やプロデュースを手掛けた他のアーティストの作品も数多く、この場では紹介し切れないが、ぜひチェックしてみて欲しい。



サウンズリー マーカス・ミラー

(ワーナー・ミュージック：WPCP-3570)

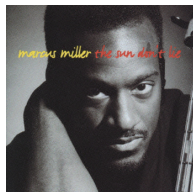
マーカスがリード・ヴォーカルや打ち込みを担当した記念すべきデビュー・アルバム。録音は1982年、翌1983年に発表された。全9曲収録。



ザ・マン・ウィズ・ザ・ホーン マイルス・デイヴィス

(ソニー・ミュージック：SRCS-9722)

マイルス・デイヴィスが6年間のブランクを経て、1981年に発表した復帰第一作。マーカスはフェルトン・クルーズと共にベーシストとして参加。



ザ・キング・イズ・ゴーン マーカス・ミラー

(ビクターエンタテインメント：VICJ-5042)

マーカスが1993年にリリースしたマイルス・デイヴィスに捧げたトリビュート・アルバム。自身のベース・ソロを全面的にフィーチャーした名盤。



ルネッサンス マーカス・ミラー

(ビクターエンタテインメント：VICJ-61665)

2012年5月にリリースされた前作『フリー』以来の5年振りとなるスタジオ録音作。ボーナス・トラックを含む全14曲収録。【P10にレビュー掲載！】